

短 報

2020年度前期オンライン学習期間における 学部老年看護学関連科目の演習報告

亀井 智子 川上 千春 河田 萌生 江藤 祥恵 猪飼やす子

Education Report on the Practice Curricula of Gerontological Nursing in an Undergraduate School of Nursing During the Online Learning Period in the First half-semester of 2020

Tomoko KAMEI Chiharu KAWAKAMI Aki KAWADA Sachie ETOU Yasuko IGAI

[Abstract]

In April 2020, the first half of the academic year began to be conducted online in St. Luke's International University School of Nursing owing to the SARS-CoV-2 (COVID-19) pandemic. Under the gerontological nursing curricula, the authors had previously set 17 competencies as the goal for undergraduate gerontological nursing education; thus, it is important to discuss how to provide lectures and practice programs to students in the online education setting. The authors provided a practicum for the students using "simulated experience of the older adult" (under Human Development II for freshmen); "communicating with older adults with neurocognitive disorders," "nursing care for people with behavioral and psychological symptoms of dementia (BPSD)," "nursing care for people with chronic respiratory failure," "telenursing," "nursing process for the older adult with hospitalization" and "care management," (under Gerontological Nursing II for juniors); and "reminiscence therapy for the older adults," "telenursing," "preventive care for older adults with delirium," and "students' presentation" (under Health Promotion for the Older Adults for seniors). This effort was devised considering extreme situations wherein several restrictions would be imposed in terms of conducting indirect face-to-face communication between faculty members and students and among students in cyberspace, and also considering that there were few resources for program preparation and the construction of teaching materials. Owing to the nature of nursing for older adults, there remained concerns about the lack of experience from direct interactions with people. Thus, it is important to improve these practice programs for further gerontological nursing education.

[Key words] Online education, Gerontological nursing education, Practice program, COVID-19

[要 旨]

2020年度前期の聖路加国際大学の教育は、SARS-CoV-2 (COVID-19) 感染拡大のため、全学的にオンライン学習となった。老年看護学では、学部教育で身につける17項目のコンピテンシーを設定しているが、オンライン学習でどのように講義と演習を組み立てるかが課題となった。前期には、1年次・学士編入3年次生涯発達論Ⅱ「高齢者疑似体験」、3年次老年看護学Ⅱ「認知症高齢者とのコミュニケーション」「認知症の行動心理症状 (BPSD) への看護」「慢性呼吸不全と看護」「テレナーシング」「看護過程の展開」「ケアマネジメント」、4年次高齢者ヘルスプロモーション「回想法」「テレナーシング」「せん妄予防」「学生プレゼンテーション」でオンライン演習を取り入れたが、教員と学生、また学生同士の非直接対面かつサイバー空間で行う中での制約が多くかつ、準備期間や教材作成のためのリソースが少ない状況下で

最大限に工夫した取り組みとなった。高齢者看護の特質上、対象者との直接的相互作用から理解すべきことが欠落した点について懸念が残る、今後に向けた改善が必要であると考えられた。

【キーワード】 オンライン学習, 老年看護学教育, 演習科目, COVID-19

I. はじめに

2019年12月に発生したSARS Cov-2（以下：COVID-19）パンデミック¹⁾により、2020年4月7日にわが国でも非常事態宣言が発出され²⁾、その解除後も「密閉・密集・密接」（以下：3密）を避ける行動が推奨されている。2020年度前期の本学の教育は、オンラインによる方法で行うことが決定され³⁾、5月第3週の授業開始に合わせ、老年看護学ではオンライン学習のための教育方法や教材準備等を進めることになった。学生宅のインターネット環境を考慮し、当初は学年単位のクラスではライブ講義は行わない方針が提示され、老年看護学のコンピテンシーを学生がどのように身につけるのか、課題は大きかった。

本稿では、今年度前期の学部老年看護学関連科目のうち演習部分に焦点をあて、演習内容、教材準備や教材作成について振り返り、今後の改善点を検討する。

II. 学部老年看護学の教育方法

老年看護学教育では、老年期の特性理解を促進するため、講義科目の中に実技演習を組んで行ってきた。演習は「3密」下のものが多く、ケアの原理や方法を身につける内容であり、教材は、多くは実物・実機を使用してきた。今年度の教材配布は本学クラウド型教育支援サービス（manaba）を通じて行うこととなり、配信・公開可能な動画や資料等に限定された。

III. 学部老年看護学関連科目と演習内容

1. 生涯発達論Ⅱ（学部1年次・学士編入3年次）

2020年度前期全3科目11演習の内容を表1に示す。

本科目は、成人・老年期の心身社会的発達と生活に焦点をあて学修する。今年度から学部・学士編入合同クラス（履修者130人）となった。老年期の身体的特性とそれによる心理的反応を学修するため、高齢者疑似体験セットを装着した体験演習を行ってきた。視覚・聴覚・姿勢・歩行等の加齢性変化を体験するゴーグル、重り付きベスト、可動域制限用サポーター、耳栓、杖、手袋を装着し、立位バランス、寝返り、立ち上がり、浴槽移動、トイレ立ち座り、廊下歩行、階段昇降等30分の体験を行う。今年度は、履修者宅で実施可能な方法を考案した。

ゴーグルの代用は小穴2つをあけたA4版用紙の「お面」とした。重りの代用は砂糖袋・ペットボトル飲料1～2kgとし、前ポケット付き上着に入れ、前傾姿勢を再現した。綿手袋の代用は、各自の手袋を非利き手に2枚重ねて装着し、筋力・巧緻性低下でペットボトルの蓋をあけることとした。このほか、食器が「お面」越しで視野に入る位置、玄関での靴の着脱、自宅に階段がある場合は、階段昇降等を行った。事前配信した資料教材には、高齢者疑似体験セットを使用した例年の高齢者体験の例を動画で紹介した。

履修者5～6人1グループに教員を割り当て、計25グループが各40分間Google Meet（以下：Meet）上で演習した。教員はディスプレイ越しに学生が準備した物品を確認後、体験項目を一つずつ伝え、進行中にも声を掛け、最後に体験内容の振り返りをファシリテートした。

2. 老年看護学Ⅱ（3年次）：

1) 認知症高齢者のBPSDへの看護

例年は、講義中にグループホーム入居者の攻撃性や帰宅願望の実例動画を視聴して、認知症者とケア提供者の行動や看護のポイントを解説し、その後グループ討議を行ってきた。今年度はオンデマンドで音声付パワーポイントに同じ動画教材を埋め込み、事例を解説して動画視聴上の注目点と看護のポイントについて講義資料と結び付けて進めた。認知症者の心理状態やケア提供者の対応、他に考えられる対応方法を個別レポート課題とした。

2) 認知症高齢者とのコミュニケーション

本演習は神経認知障害（以下：認知症）看護の講義と連動し、認知症の行動心理症状（BPSD）の動画教材、認知症者の視覚・聴覚体験用Virtual Reality（以下：VR）教材による学修後、コミュニケーション演習を行っていた。VRでは、コンテンツを視聴後、看護支援についてグループ討議をワークシートにまとめる。続くコミュニケーション演習では、ユマニチュード^{®4)}の技法を紹介し、オンデマンド型講義後に、グループ演習を行った。技法の1つ「話す」では、学生を看護師、認知症者、タイムキーパー役に分けた。対象者を2分間褒め続ける演習はオートフィードバックを用いたケア実践につながるものであり「対象者を理解していなければポジティブな言葉は出ない」等、その必要性は理解していたものの、実際の技法は個別演習とした。小レポートから、理解度に差が見られ、今回は認知症者とのコミュニケーション

表1 2020年度学部老年看護学関連連科目別演習内容

学年／科目名／演習項目	単位 数	必修・ 選択	履修 者数	演習 コマ数	オンライン演習方法	演習内容
1年生・学士編入3年次生／ 生涯発達論Ⅱ／高齢者疑似 体験	2	必修	130	3	・ライブ演習 ・学生5人×26グループを編成 ・高齢者疑似体験(約20分) ・討議・考察(約20分) ・小レポート	1. 老年期の姿勢：衣服のポケットに砂糖袋やペットボトル飲料等1～2kgを入れて前傾姿勢を保つ 2. 歩行：1の状態、自室内の歩行、片足立ち、バランスなどを体験 3. 視野の狭まり：A4サイズの用紙2か所に小さく穴をあけ、お面のようを使用して保持して以下を実施 4. 小さい文字を読む：新聞、教科書などの文字を追い判読可能な体験 5. 視界：食器をテーブルの位置から目の高さまで持ち上げて移動し、視界に入った位置で静止する 6. 把持力：手袋を非利き手に2枚つけ、ペットボトルの蓋を開けてコップに飲み物を注ぐ 7. 靴の着脱：玄関で靴の着脱を体験 8. 討議：老年期の身体的特徴と心理的反応について教員のファシリテーションの下、グループ討議
3年生／老年看護学Ⅱ／ 認知症者へのコミュニケーション	2	必修	100	2	2 VR認知症体験 ・ライブ演習ユマニチュード ・オンデマンド型とグループ ワークの組み合わせ	1. VR認知症コンテンツをファシリテーターのもと視聴と意見交換 2. ワークシート課題を考察 1. ユマニチュードの考え方を理解するためのオンデマンド型講義を視聴 2. ZOOMによるブレイクアウトルームを用いて基本の4つ柱の1つである「話す」を実施 3. 全体ZOOMで学びの共有
認知症高齢者のBPSDに対 する看護	1			1	・オンデマンド型 ・ワークシートの課題 ・ライブ講義	1. BPSDのある認知症高齢者の動画と参考授業資料の説明の視聴 2. ワークシート課題を考察
高齢者への呼吸ケア(慢性 呼吸不全、 肺炎、COVID-19含む)	1			1	・ライブ講義	1. 鼻カニューラ、ピークフロー等の呼吸リハビリテーション用具の使用は授業の中で動画を確認 2. 用手的排痰手技は、自宅のクッション、枕を用意して動画を見ながら手技を確認
高齢者ケアへのテクノロ ジー活用	1			1	・ライブ講義	慢性疾患在宅療養高齢者事例を提示し、遠隔モニタリングとテレナリングについて検討
高齢者と家族への看護過程 の展開	3			3	・ライブ講義とグループワーク (約160分) ・学生3～4人×25グループ	1. Zoomによるライブ講義と事前課題を提示し事前学習を実施 2. グループワーク①：事前学習内容の共有とGoogleスライド上でワークシートの実施 3. 自己学習：課題を提示し各自学習を実施 4. グループワーク②：自己学習内容の共有と課題の実施。その他はグループ①と同様 5. 発表とまとめ：3グループからの発表、および教員からのまとめの講義
介護保険にもとづくケアマ ネジメント 演習	2			2	・ライブ講義とグループワーク (約90分) ・学生3～4人×25グループ	1. ケアプラン、ケアプラン作成手法、介護保険制度に関するライブ講義 2. 自己学習：課題を提示し各自学習を実施 3. グループワーク：自己学習内容の共有とGoogleスライド上でワークシートの実施 4. 発表とまとめ：2グループからの発表、および教員からのまとめの講義
4年生／高齢者ヘルスプロ モーション／ 回想法演習	1	選択	8	2	・ライブ講義と演習	講義に演習を組み込み、学生2名1グループとして、Meet上で回想法の計画についてグループ討議と発表
テレナリング演習	2			2	・ライブ講義と演習	テレナリング模擬事例のモニタリングデータからアクセスメントとテレメンタリングの検討
せん妄予防の看護	2			2	・ライブ講義と演習 ・学生3人×5グループ	1. 研究的取り組みを紹介後、学生個人で興味のあるせん妄予防に関する文献を検索・クリティーク 2. グループ討議後、グループ毎に発表、質疑応答
プレゼンテーション	1			1	・発表会	1. 各自のテーマに関する文献検討から高齢者看護のあり方についての資料作成 2. 教員はZoomにて待機し、学生の質問や疑問に回答 3. 学生が司会、タイムキーパーを担当し、Zoom上で資料を共有しながら発表、質疑応答

方法を身につけることに限界があった。

3) 高齢者への呼吸ケア

例年は、呼吸ケア用具、および鼻カニュラを自身で正しく使用・装着する実技、その後、慢性呼吸不全者の在宅酸素療法機器の操作演習を行ってきた。今回は、教材の事前郵送の許可が得られず、演習用具が履修者の手もとに無い状態で実施することとなった。そこで、講義はリアルタイムライブで行い、講義スライドに映像動画を埋め込み、解説した。また、用手的排痰手技では、履修者宅の枕やクッションを胸郭に見立て手技を学ぶ方法とした。履修者から、動画が多く使用され、理解しやすかったとコメントがあった。筆者は制約を感じた演習であったが、履修者には実技学習の助けになっていたことが確認できた。しかしながら、鼻カニュラや酸素機器の取り扱いが行えなかったため、理解の達成には課題が残った。

4) 高齢者ケアへのテクノロジー活用

近年の情報通信技術を医療・ケアへ活用が進展し、高齢者看護への様々なテクノロジー導入が広がっていることをふまえ、今年度から本科目に加えることを計画していた。テクノロジーのケアへの活用、慢性疾患在宅療養高齢者への遠隔モニタリング、テレナーシングの理論と実践例について、遠隔医療機器や諸外国の例も紹介しながら、高齢者の健康・生活支援にいかに関テクノロジーを利用するのか講義し、模擬事例のアセスメントとテレナーシングの方法について、履修者からの意見を求めた。

5) 高齢者と家族への看護過程の展開

オンライン学修の課題として、履修者側のインターネット通信量を抑えてグループワークの質を保証することが挙げられた。グループ内に通信量制限がある学生がいる場合、ビデオ画面は停止して音声参加とし、通信量の節約を促し、グループワーク時間は例年の2/3に抑えた。高齢者と看護過程の講義後、演習事例について履修者がアセスメント方法を個別学習し、高齢者のもつ「強み」に着目した「目標志向型」の看護課題の抽出をグループで検討した。討議内容はGoogle スライドを共有ワークシートとし、これに沿って包括的アセスメント、看護課題の抽出、看護計画の立案を進めた。オンライン討議は少人数で行うことが推奨されている⁵⁾ことから、1グループ3～4名とし、同時に計25グループを教員4名で分担し、Zoom 上リアルタイムで質問対応を行った。教員は共有ワークシートを閲覧して討議内容を把握するとともに、従来のポスターツアーの代替として、全体でもワークシートの共有をはかった。履修者からは「自分では思いつかなかった意見を聞くことができ、とても勉強になった」等が挙げられた。演習後レポートにおいても、学習目標は十分に達成されたと評価できた。しかし、演習中にビデオを停止したグループでは討議が進んでいない状況や私語が散見され、履修者2名の通信が途切れ討議に十分

に参加できない事態が発生した。これらから公平性の欠如は否めなかった。

6) 介護保険にもとづくケアマネジメント演習

本演習では「日本訪問看護財団方式日本版成人・高齢者用アセスメントとケアプラン」⁶⁾ データセットを用い、グループワークを通してケアプラン作成までのケアマネジメントプロセスを学修している。本データセットは、著作権により manaba 上で公開できないため、履修者には事前郵送を行った。介護保険制度とケアマネジメント等に関するライブ講義を行い、模擬事例のアセスメントを個人学習後、グループで討議課題の焦点を絞り、90分間Zoom 上でグループワークを行った。2回目のオンライングループワークであったが、予定した内容を半数以上のグループで終了できなかった。また、「この演習の必要性がわからない」という発言が聞かれ、対面では教員が学生の疑問に回答しながら進めてきたことが、オンラインでは、質問したい履修者の表情などをうまく把握できない限界があり、演習目的を達成できなかった学生が一定数いたことを把握した。

3. 高齢者ヘルスプロモーション（4年次）

1名がインターネットの利用に不安があると申し出たため、教務課からWi-Fi ルーターを貸出して、自宅環境を予め整えた。本科目は選択科目で履修者は8名であったため、初回からライブ授業とした。

1) 高齢者のための回想法演習

講義中に2回の討議を組み込み、履修者二人一組で高齢者に回想法を実施するにあたってのテーマの設定、回想を促す刺激物の用意、リーダー、コ・リーダーと利用者の席次等について短時間Meet 上の別室で話し合い、再度全体会に戻り、プレゼンテーションを行った。予め、パワーポイント上にグループ回想法の利用者の特徴を絵柄で示し、テーブル図を設定しておき、利用者の特性を配慮した席次、リーダー・コリーダーの位置等を設定し、画面共有しながら学生はプレゼンテーションを行った。

2) テレナーシング演習

今回は遠隔医療・テレナーシングの変遷、実施方法等のライブ講義に続き、模擬事例の遠隔モニタリングデータのアセスメントとメンタリングの方向性について全体で検討するとどまった。

3) せん妄予防の看護

せん妄予防のための研究的取り組みをライブ講義後、論文クリティークの発表を行った。論文が同一もしくは類似した履修者2～3人のグループを作り、Zoom ブレイクアウトルームでせん妄予防の看護について討議し、Google スライドを共有して討議内容を書き込みながら進めた。教員はグループを巡回し、討議の観察と質問への回答を行い、その後、メインルームで各グループのGoogle

スライドを画面共有し、発表と討議を行った。

4) プレゼンテーション

「高齢者看護のあり方」について、履修者のテーマに関する文献検討で発表と討議を行った。プレゼンテーションはタイムキーパー、司会とも学生が担当し、履修者が自身の資料を共有しながら行った。本科目は開講時期が遅れたため、第9回と第10回の間に1か月間中断して総合実習が入ったが、その間に教員のWeb会議の経験が蓄積され、大学のWeb会議ツールがMeet以外にも導入される等変化が生じ、第10回以降の討議にはZoomのブレイクアウトルームをより活用した。学生はどちらのWeb会議システムにもアクセスの問題はないようであった。

IV. 考 察

1. オンライン演習における達成内容

老年看護学が行ったオンライン演習は、制約のある中で方法を工夫して実施し、全ての履修者が自宅から受講できた点で、教育の保証を行うことができた。これらにより、教育として達成できた点は以下であった。

高齢者疑似体験演習では、オンラインでも入学後間もない1年生が高齢者の身体的特性についておおむね理解できた点である。各履修者とも自宅にある物品を工夫し、準備して臨んでおり、これにより高齢者の視野、姿勢、歩行、手指巧緻動作等の特性を従来と同水準で体験でき、聴覚以外の高齢者の身体的機能の特徴、およびそれによる心理的影響を説明することができていた。教員からはディスプレイ越しに、履修者が工夫に富んだ物品を用意し、それぞれの項目について体験的に学んでいることが確認できた。また、高齢者の日常生活上の支障について率直な意見が挙げられ、活発な討議が進んでいた。1グループ5人の配分が身体的な動きを伴う演習を教員がディスプレイ越しに確認できる数として適切であると考えられた。

認知症高齢者のコミュニケーション演習では、会話のきっかけは実施できたが、これ以外は大幅に実施できなかったため、対面実習時などでの補習が必要である。一方で、認知症高齢者のBPSDに対する看護演習はワークシート課題の記述内容から、事例への看護を考えていたことが確認でき、BPSDの出現とその要因や対応の方法を理解できweb上でのグループワークでも意見交換が、個人学習を超えて行えていた。

4年次の高齢者ヘルスプロモーションは、プレゼンテーションでは履修者間の円滑な連携により資料を画面共有して進められ、討議と質疑応答も活発に進み、PC操作技術も身につけていたことが良い成果につながったと考えられた。

オンライン演習を自宅から一人でも能動的に参加するために、事前に演習目的や内容、使用物品、時間配分などを明確に伝え、グループの学生相互に意見を出し合い、主体的に学修する協同学習⁷⁾が重要である。今回は教員の演習準備にかけた項目と時間は従来よりも多く、履修者自身も自宅での準備と事前学習といった主体的学修が行え、背景には学生宅の通信環境の支援を大学として行ったことなどが、協同学習につながったと考えられた。

2. オンラインでの演習における制約と改善点

オンライン演習では、高齢者の色覚と難聴への支援項目が学修できず、色覚変化に応じた色使い、難聴者への話しかけ方、声のトーンと大きさの理解が困難であった。特にこれらの具体的な援助経験は、対面演習が必要である。また、コミュニケーション演習では、取り組みに差がみられ、オンライン演習では身につけることが困難で、対面演習が不可欠であった。このように、対面演習が不可欠な項目、オンライン演習で修得可能な項目を明確化し、演習構成を検討することが重要である。特に、認知症高齢者のBPSDに対する看護演習では、学生からの細かな質問等に答えながら教員がファシリテートすることや、履修者間の意見交換もできなかったため、協同学習として他者の視点を得るためには、ライブ討議を設けるよう改善が必要であると考ええる。

また、ケアマネジメント演習では、例年の学習内容への到達が困難であった。これは課題の難易度が高いため、教員のグループへの参与の不足やグループワークに費やした時間が不十分であったこと、また対面であれば教員側が気づいてグループの質問に対応しているものが、オンラインでは質問が上がってから教員が対応するというタイミングの問題が要因として考えられた。特に検討課題の難易度が上がる演習では、オンライン上では意見交換が円滑に進みにくく、影響が増大する傾向が確認された。課題の提示内容の再検討とオンライングループワークへの具体的サポート方法、対話のタイミングをルール化する等の検討が重要であると考ええる。

ライブ授業が許可された6月以前はオンデマンド授業を行っていたため、履修者はその受講に慣れつつあった。そのため、リアルタイムで実施した本報告の演習では、通信環境の不安定さを訴える学生や画像が途中で停止した学生が数名あり、対応が必要であった。

各学年のオンライン講義を経験し、学生自身のPC操作能力、学生間の連携が円滑な授業運営の一助となることを理解できた。PC操作に慣れている上級生を募り、「クラスサポーター」として任用する報告があり⁸⁾、特に新入生には入学当初から学生間の関係作りの機会の提供やPC操作の支援に有効であると考ええる。

インターネット環境については、配信元の研究室は常

時バックアップ用の PC を必ずつないでおくことやインターネット環境の再整備の必要性、さらには、周囲特に屋外からの騒音の消音対策が課題として残った。また、履修者にも、通信量を気にした学習、通信切断による参加中断があり、双方にストレスがあった。このような環境下では、遠隔教育の推進方策として、教員の ICT 機器の準備等の負担を軽減する ICT 支援員の配置が提言され⁹⁾、授業運営のための人材確保も重要であると考えられた。

2020年度前期は状況が度々変化する中、これまでとは大幅に異なる演習の展開を経験した。演習は、講義で理解した抽象を実習での高齢者看護の具体へと結びつける位置づけであり^{10, 11)}、看護を学修する上で、従来の対面演習と遜色のない教育の質を保つことが重要であると強く考えている。学生が修得するコンピテンシーに基づいた教育は以前から求められ¹²⁾、さらに Covid-19 感染拡大により、オンライン教育や演習におけるコンピテンシーに基づいた教育を実現するための試行錯誤が全世界的に求められている¹³⁾。老年看護のコンピテンシーを修得するための改善策として、学期当初に演習用器材・教材をキット化し、学生に郵送する等、教材利用について、より配慮することが重要である。これと同時に、老年看護学の教員は、オンライン演習に関する研鑽を重ね、演習目的に応じて、オンデマンド、ライブ、対面実施の特徴を生かして、教授方法を選択、あるいは併用する能力を向上することで看護教育の質を保証する必要があると考えられた。

3. オンライン演習の限界

音声のみで参加する履修者の反応をどのように確認するか、検討が必要である。また、各科目の演習に共通してサイバー空間上の討議の仕方に課題があり、発言から他者に声が届くまでのタイムラグや会話のぶつかりを回避する発言のタイミングが難しく、そのタイミングを逸すると、討議にならず、ストレスとなる。そのため、オンライン演習の限界をどのように乗り越えるのか、さらなる検討が必要である。

引用文献

- 1) World Health Organization. Coronavirus disease (COVID-19) pandemic [Internet]. [https://www.who.](https://www.who.int/emergencies/diseases/novel-coronavirus-2019)

- int/emergencies/diseases/novel-coronavirus-2019 [cited 2020-08-03]
- 2) 首相官邸. 新型コロナウイルス感染症対策本部 (第 27 回) [Internet]. https://www.kantei.go.jp/jp/98_abe/actions/202004/07corona.html [参照 2020-08-03]
- 3) 聖路加国際大学. 2020年度前期授業 (看護学研究科・看護学部) について [第 4 報: 2020/4/20]. [Internet] <https://university.luke.ac.jp/news/2020/jgl9rh0000004hnm.html> [参照 2020-08-03]
- 4) Marescotti R, Pellissier J, Gineste Y (辻谷真一郎訳). Hummanitude (ユマニチュード): 老いと介護の画期的な書. 東京: トライアリスト東京; 2014.
- 5) 小林真也, 黒田久泰, 遠藤慶一. 遠隔環境におけるグループワークの実践. 国立情報学研究所. 【第 5 回】4 月からの大学等遠隔授業に関する取組状況共有サイバーシンポジウム (4/24 オンライン開催) [Internet]. https://www.nii.ac.jp/news/upload/20200424-8_Ehime.pdf [参照 2020-10-13]
- 6) 内田恵美子, 島内節. 日本版成人・高齢者用在宅ケアにおけるアセスメントとケアプラン: 財団方式. 第 4 版. 東京: 日本看護協会出版会; 2004.
- 7) 安永悟. 活動性を高める授業づくりー協同学習のすすめ. 東京: 医学書院; 2012.
- 8) 田浦健次郎, 明比英高, 秋田英範ほか. 東京大学におけるオンライン授業の始まりと展望. コンピュータソフトウェア. 2020; 37(3): 2-8.
- 9) 文部科学省. 遠隔教育の推進に向けた施策方針 (平成30年 9 月14日版) [Internet]. https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/zyouhou/detail/_icsFiles/afildfile/2018/09/14/1409323_1_1.pdf [参照 2020-10-16]
- 10) 山田剛史. 大学教育におけるアクティブ・ラーニングの意義と課題. JACET Kansai Journal. 2017; 19(1): 1-20.
- 11) 梶田毅一. 教育評価. 第 2 版. 東京: 有斐閣; 2010.
- 12) 新井英靖. オンライン授業に対する疑問や不安. 看護展望. 2020; 45(9): 34-7.
- 13) Morin KH. Nursing education after COVID-19: Same or different? J Clin Nurs. 2020; 29(17-18): 3117-9.